研究課題名

非小細胞肺癌に対する根治的化学放射線治療後のデュルバルマブ療法における[redacted]

間質性肺炎発症[redacted]に対するリスク因子の検討

研究責任者名　広島大学病院呼吸器内科　教授　服部　登

研究期間　　2019年4月18日（倫理委員会承認後）より2023年3月31日まで

対象者

2018年7月2日～2022年3月31日（解析期間等含む）の間、非小細胞肺癌に対する根治的化学放射線治療後にデュルバルマブ療法を受けた成人患者さん

意義・目的

手術では取り切れない肺癌に対しては化学放射線治療が行われますが、治療終了後に再発することも多くその治療成績は十分とは言えず、新たな治療方法の開発が強く望まれていました。そこに登場したのが、免疫治療のひとつであるデュルバルマブ（抗PD-L1ヒトモノクローナル抗体）です。化学放射線治療後にデュルバルマブを投与した症例では、経過観察のみの症例に比べて約11ヵ月の無増悪生存期間の延長が認められました。この試験結果により、切除不能局所進行非小細胞肺癌における根治的化学放射線治療後の維持療法としてデュルバルマブ療法が我が国でも承認され、肺癌診療ガイドラインでも投与が提案されており、とても重要な治療方法となっています。

しかし、この治療により生じる副作用として間質性肺炎があり、時に命に関わる重篤な病態です。つまり、どのような患者さんに間質性肺炎が起きやすいかを調べることは、有効且つ安全に治療を行うために重要です。

本研究においてこのリスク因子を調べることにより、化学放射線治療後のデュルバルマブ療法に[redacted]

[redacted]

広島大学　教授　服部　登

個人情報の保護について

調査内容につきましては、プライバシー保護に十分留意して扱います。情報が個人を特定する形で公表されたり、第三者に知られたりするなどのご迷惑をお掛けすることはありませんのでご安心ください。

研究に臨床データや試料を提供したくない場合はお申し出ください。お申し出いただいても不利益が生ずることはありません。

問合せ・苦情等の窓口

〒734-8551　広島市南区霞 1-2-3
TEL：082-257-5196